

〈修士論文要旨〉

宋代海商の交易ネットワークについての考察

* 横田 絵里香

一〇世紀初頭に唐が滅亡し、五代十国の混乱期に入っても呉越国の海商を中心に中国海商たちの貿易活動は続けられた。一〇世紀末以降、宋が統一を行い、農業をはじめとする諸産業、国内外の商業活動及び科学技術の発展がもたらされ、中国海商の日本来航が頻繁となり、日宋貿易が展開していく。

日宋貿易の構造とその展開については、かつて森克己氏による詳細かつ体系的な研究によって示されている。日宋貿易の研究に関しては、森氏の説を通説として、長く受け入れられ独壇場といったかたちとなっていた。しかし、近年森氏の通説的な図式に対して、山内晋次氏などにより再検討がなされている。その他にも多くの研究者が日宋貿易の様々な分野で研究が行われている。

その中で本論は、日本における海商の交易ネットワークについて考察し、海商の人的関係を築く活動についての意味について考察した。

海商の活動を明確に示す史料は、中国側の史料には少なく、日本は日記などに比較的多く海商の活動の記事がみられる。本来は東洋史専攻であるため、中国側の史料を用いて海商の考察をすべきだが、比較的海商の活動を示す史料が多い日本の史料を用いた。

これまでの研究においては、日宋貿易システムを中心とした考察が多くを占めており、海商側の視点に立った考察があまりされなかったように思う。少しではあるが、海商の人的ネットワークの活動の意味について考察した。

本論は、次のような章立てで構成される。

第1章 研究史

第2章 平安期における貿易形態と唐物

本章では近年の研究動向を受け、森氏が導き出した通説的な日宋貿易形態と近年の森氏の論に対す疑問を基に、中国海商の来着時の受け入れ手続きなどの貿易形態の把握を行った。また、その貿易形態を巡る海商の動きについて考察し、平安期の政府にとっての中国海商の来航の意味と、対外意識について考察した。

貿易形態を見ていく中で、年紀制による廻却(帰国措置)から一転安置という記事がしばしばみられ、この事例をあげた。さまざまな理

由づけにより、一転安置となつてゐるが反対に安置になつてゐない海商の存在もある。一例の中に、内裏火事による唐物の不足という理由が上げられているが、こうした理由づけによる政府側の臨機応変的な対応は、何らかの意図が存在していると考えられ、固有の海商を取り込みたいという意図がやはり存在していたとした。内裏の火事は二回起こつてゐるが、この海商のみを安置としても唐物は十分だとは言ひ切れない。内裏に置くということは、それだけの質の品を扱つていなくてはならないということであらう。海商にも種類の海商があり、高質なものも扱える海商が貴族層や政府に珍重されていたのではと仮定した。

年紀制成立以前に見られる公交易前の貴族層による交易を禁じていることから、貴族層は決して唐物入手することに対する欲求はなくなつていないと思われる。

その欲求を満たすために、石井氏が示しているように宋海商と日本人との契約について触れ、貴族層の欲求に海商が答え、海商も同時に利益を上げていたと思われる。

第3章 中国海商と中央・貴族層との結びつき

前章で日本における貿易形態の中での海商をみてきた。その中で、海商が大宰府官人や貴族層、一般の人々との僅かながらではあるが、関係を結べる場面が伺えた。

その前章を踏まえ、この貿易システムの中で海商と現地人との関わりを例にあげ、関わりについてのようなものがあるかをみていく。中でも、中央・地方役人などとの結びつきに重点におき、関係性を探ることにより人的結びつきが、海商の活動にどのように作用しているのかを検証した。

安置・廻却をめぐる海商と官人の関係性として前章でも取り上げた海商周文裔の活動をみていく。海商周文裔は、海商の中でも大きな海商であつたように思われ、中央権力者や地方長官などと重要なかわりが見受けられ、また、息子である周良史は日本人との子供であり、その立場から藤原通長に名籍を献上して爵位を求めると、海商の活発な活動が伺え、注目し考察した。

一節では、周文裔―周良史の親子の活動について注目し、混血児である良史のその立場の活用や、彼らとの関係が伺える藤原道長・藤原頼通・藤原実資・大宰府大貳藤原惟憲・高田牧司宗像妙忠との関係を上げた。

二節では、その他の海商と官人・僧との関係性をみていき、一・二節でみてきた官人などとの繋がりを持つということが、海商にとつて日本で活動し交易を行つていくうえで重要になっていることはもちろん、官人や僧など地位のある人物の依頼を受けるといふことは、海商にとつて確固たる海商としての地位を保持するためにもこのような繋がりは重要になることを示した。

また、義天の記した書物や經典などそのような類の物入手してお

り、劉文冲が名籍と史書を一緒に献上していることなどから海商が単なる運搬に従事しているだけではなく、様々な交易品を扱い入手できるだけの力や立場にあるということを示し、それを入手できるだけのネットワークや交易力を保持していたといえる。

三節では、周良史が名籍を献上した後に、日本進奉使として宋に進奉した一連の件について、後海商が官人を訴えることにより築き上げた関係を壊してしまう理由について検証した。

海商としては、官人・僧などと唐物の販売に関して契約を結びその関係性を強め、より中央政府に近い官人たちと交易をおこなうことを望み、関係を結んでいくことに意欲的であった。その関係性は、海商にとつての社会的地位の向上につながるものとなっていた。現地勢力の交易管理に従順であり、時に徳化などをうたい政府側に入り込むなどし、交易においてはより質のよい唐物を運んでくることを示すことで、政府や貴族層に珍重される海商となっていくことが、より優位に立った交易を行う方法だったといえる。

第4章 潜在形態

海商がどのような人的関係を形成していたのかについて考察し、その関係形成の意味について論じてきた。

宋海商の東南アジア諸国での交易における潜在状況について述べるとともに、日本での潜在形態についての諸研究をもとに確認し、海の

窓口であった太宰府鴻臚館のある福岡・博多を中心とした宋人海商の痕跡をたどった。

近年福岡市街地での発掘調査の進展により、これまで文献では十分に明らかにならなかった地域における対外交易状況が解明されつつある。その中、発掘調査の大きな成果として、「博多遺跡群」の発掘調査の成果をあげた。

交易拠点地の移動が推定され、この地に「唐房」と呼ばれる中国人集住区域、「住蕃」が形成されたと推測される。また、この住蕃は東南アジア諸国では、広く見受けられる潜在形態であり、海商たちは交易国に長く滞在し、交易をおこなっていく中で国家権力と結びつき、商人としてだけではなく朝貢を行うという国家外交的な役目も担っていたことがわかっている。

この東南アジア諸国での海商の活動と日本の海商の活動とは、さほど変りはない。しかし、日本においては、年紀制を中心とした貿易システムが成りたっており、また宋朝と朝貢というところが違っているが、海商の意識としては同様のものであったと考える。

第5章 まとめ

主に海商の交易に関する人的繋がりについて、考察を深めてきた。海商の人的関係を築く活動の意味についての観点で、今回研究をおこなっていった。

各章で上げた、政府や貴族層、僧などと海商が様々に関係をみるこ
とができる。こうした海商の人的ネットワークを築こうとしている動
きは、それぞれが大手の取引先であるという部分はもちろんであるが、
海商として商人である地位向上のためともいえる。

国家権力と結びつくことは、より大きな利益を得ることはもちろん
だが、多く存在している海商の中で地位を向上させる意味を持つてお
り、それが地方官人や僧であっても一つ一つの関係が重要であり、海
商の地位の証明であるため海商はこうした人的ネットワークをつくる
活動をおこなっていたのだと考察した。